時事新報

東京　明治十七年十月一日　水曜日　第七百七十七號　日曜日休刊　定價金三錢

時事新報

虎豹餌食ヲ爭フ

佛國水師提督「クルベー」ガ其率ル所ノ十餘艘ノ艦隊ヲ以テ八月廿三日福州閩江羅星塔碇泊所ニ於テ支那ノ水軍ト塵戰シ軍艦九艘ヲ沈メ廣艇幾十ヲ燒キ其翌日ハ馬尾ノ造船所ヲ砲擊シテ微塵ニ碎キ夫レヨリ又艦首ヲ轉シテ江流ヲ下リ行ク〳〵金皮閩安等ノ砲臺ヲ砲擊シテ一齊ニ破壞シ尽シ斯クテ閩江ヲ出ルノ後ハ數日間其往ク處ヲ知ラズ世人皆此艦隊ノ所在ヲ測リ得ザル折柄九月上旬十四艘ノ艦隊忽然トシテ閩江口ノ媽祖嶼(マツオー)ニ現ハレタル以來既ニ一箇月ノ時日ヲ經過シタレ𪜈此艦隊ハ依然同所ニ碇泊シテ何ノ爲ス所モナク進退何レトモ決スル所ナキガ如キ有樣ナルハ世人ノ不審ヲ措カザル所ナリ

佛國政府既ニ意ヲ決シテ支那ト交ヲ絶チ台灣ヲ砲擊シ福州ノ水軍ヲ滅沒シ明ニ世界ニ示スニ開戰ノ實ヲ以テシタル後忽チ逡巡シテ敢テ進ニ相迫ラズ十四艘ノ軍艦悠々福州ノ海ニ寄泊シテ空シク糧食ヲ費シツヽアルハ其本意ノ在ル所窺ヒ知リ易カラザルナリ蓋シ其原因ハ必ズ一二ニ止マラザルベシト雖𪜈其最モ著シキモノトシテ數フベキハ佛軍ノ兵力尙ホ甚ダ不足ナル一事モアルベシ佛人ノ軍略唯徒ラニ破壞亂暴ヲ主義トシ某ノ砲臺ヲ毀チ某ノ市邑ヲ燒キ無益ノ殺生(セツシヤウ)ニ支那人ヲ恐怖セシメ又憤怒セシメントスルモノナランニハ十餘艘ノ軍艦ハ支那海及ビ其港灣ヲ橫行スルニ十分ノ力アリ決シテ不足ヲ感スルヿナカルベシト雖𪜈若シモ其軍略ニシテ或ハ要衝ノ地ヲ占領シコレヲ根據トシテ永久ノ大策ヲ運ラサントスルモノナランニハ十餘艦ノ力未タ以テ此大用ニ任スルニ足ラズ必ズヤ數千或ハ數萬ノ陸兵ヲ得テコレト力ヲ倂セ永ク一所ニ止マリテ寄セ手ノ支那兵ヲ打拂フノ手配リナカルベカラズ是即チ「クルベー」提督ガ其率ル所ノ艦隊ト共ニ久シク閩江口ニ碇泊シテ未タ何等ノ運動ヲモ始メザルモノナランカ然リト雖𪜈提督ノ徒ニ漫ハ唯援軍ノ來ルヲ待ツニ在リ本國政府モ亦早ク援軍ヲ送リテ功ヲ收メントスルモノナリト臆定シテ爰ニ一ノ不審ハ佛清兩國ノ間ニ和親ノ交全ク絶エ兩國ノ海軍福州ニ塵戰シテ清軍大敗以來既ニ六週間ヲモ經タルニ此程漸ク佛國ヨリ來著ノ軍艦ハ陸兵僅カ千五百人計リヲ齎ラスノミニシテコレニ續キ數萬ノ援軍既ニ其途ニ就キタリトモ聞エザル事ナリ支那兵如何ニ怯ナリト雖𪜈其多數ハ甚タ恐ルベシ僅カニ二三千ノ佛兵ヲ以テ帝國ノ要地ヲ占領シ永クコレヲ守リテ能ク其無數ノ敵兵ニ抗シ得ベシトハ佛國政府ト雖𪜈決シテコレヲ其心ニ許サヾルヿナランソ既ニ其心ニ許サズシテ尙ホ其援軍ノ派遣ヲ急ガザルヲ見レバ或ハ人ヲシテ佛國政府ハ未タ支那ヲ擊ツノ決意ナキカ虎狼ノ兵ヲ以テ犬羊ノ軍ヲ驅リ功名ヲ博シ實利ヲ獲ムノ欲心ナキカト疑ハシムベキニ似タリト雖𪜈其實ハ佛人專欲ニシテ支那從軍ヲ急ガザルニアラズ唯歐洲人皆タ多欲ニシテ獨リ佛人ニ利ヲ專ラニセシムルヿヲ好マズ彼等ノ間ニ利益均分ノ議論尙ホ未タ落着セザル所アルガ爲メナルベシ獨逸幷ニ其隨使ニ從フ墺地利、伊太利等ノ諸國ハ今回ノ佛清事件ニ關シ十分佛國ヲ贊成シテ毫モ其働キヲ妨ケズ西班牙モ亦自家ノ利益ヲ取テ佛國ノ利益ニ結合シ飽クマデ佛人ノ東洋政略ヲ贊助スト雖𪜈獨リ英國ハコレヲ贊セズ啻ニ贊セザルノミナラズ力ノ及ブ限リ如何ニモシテコレヲ妨害セントスルノ意アリ唯未タ大ニコレヲ事實ニ施サヾルノミ佛人既ニ英人ノ意中ヲ知リ其專橫ヲ怒リ其貪婪ヲ厭ヒテ惡ムト雖𪜈其力未タ以テ英人ニ敵スルニ足ラズ假令今回ノ事件ニ關シ獨魯諸國ノ聲援ハアリトスルモ此聲援ハ歐洲大陸ニコソ大勢力アレ遠キ東洋地方ニ齎ラシテハ格別ノ用ヲ爲サヾルガ故ニ英人ハ尙ホ未タ侮リ易カラザルナリ然ルニ幸ニシテ目下近ク埃及ノ事アリ英人ハ其兵力ト金力トヲ盡シテ只管埃及ヲ倂呑セントシ其功將サニ成ラントシテ未タ成ラズ苦心煩悶ノ最中ナリ依テ佛人ハ此機會ニ乘シ先ツ獨魯兩國ノ許可贊成ヲ得テ埃及政府即チ其後見タル英國政府ニ向ヒ前年「アレキサンドリヤ」港砲擊ノ際ノ損害要償ノ議ヲ持出シ否ト云ハヾ「カイロ」府駐在ノ交際官佛國總領事ヲシテ直チニ埃及ノ國境ヲ立去ラシメントセリ隨分念ノ入リタル恐嚇ト稱スベキナリ佛人謂ラク汝英人我レニ支那ヲ與ヘジトナラバ我レモ亦汝ニ埃及ヲ與ヘジ支那埃及取捨汝ノ擇ブ所ニ任スベシト斯ル切迫ノ談判ト爲リタル以上ハ英國政府モ最早曖昧ノ手段ヲ以テ佛清事件幷ニ埃及事件ヲ處分スベカラズ早晩必ズ何トカ決着ノ返答ヲ爲サヾルヲ得ザルベシ巴里ノ政府ガ此返答ヲ受取ルノ日ハ即チ福州ノ佛軍ガ其向フ所ヲ定ムルノ日ニシテ目下「クルベー」提督ガ戈ヲ枕ニシテ媽姐嶼畔ノ月ニ假寐シツヽアルハ蓋シ英國ノ晨雞未タ一聲曉ヲ告ケザルガ爲メナランノミ

電報

○九月十七日龍動發　露獨兩國の宰相は昨日を以て會晤したり○聖、彼得堡新聞は露獨兩帝は從來の交誼を厚うすることを勉むるも新に盟約を爲すに非ざる旨を記せり

佛清事件

○佛國艦隊　九月廿四日芝罘(チーフー)發同廿九日東京の或る方へ達したる電報に佛國軍艦五艘登州沖の一嶋に現はる尙は數艦を增して芝罘に來るならんとありたる次第は既に昨日の紙上に記し置きたるが昨朝又東京の或る方へ上海より達したる電報には

佛國艦隊ハ依然媽姐ニ在リ

とありたり此電報に依ればクルベー提督の引率せる十餘艘の艦隊は今尙は依然福州閩江口の媽姐(マツオー)に碇泊し居りて何方へも赴かざるものなるべし左すれば九月廿四日に登州沖に見えたりといふ船は佛艦にあらずして他國の艦なりしの誤か又全くの虛報を傳へたるものか疑はし芝罘は直接電信線の通し居らざる所より兎角何事も分明ならざるを

○ビスマーク公の機略　佛清事件に付き日耳曼の輿論が佛國を贊成する由は既に前號にも掲げしが或西人の說にビスマーク公が其仇敵なる佛國をして東洋に其遠略を縱まゝにせし先己れ曾て之に關係せざるもの丶如きは抑故ある事あり其故といふは先づ公は英國が久しく獨り威權を東洋に振ふことを惡み如何にもして英人の權を挫き呉れんと只管思案を凝らす折節圖らずも此度佛國が事端を支那に生したるを見て是ぞ得難き機會なりイデ思入(おもいれ)佛國を煽り立て丶充分に其力を用ゐさせし先んみぞ得策なれ若し佛國にして志を東洋に得ば英國の威力を殺ぐこと勿論又假令志を得ずとも之が爲めに英佛兩國の憤怨を增して互に相爭ふに至ること必然なり諺に云ふずや鷸蚌の爭ひ漁父の利、兩虎相鬪ふ其勢俱に生きぞ結局殺して之を獲るは獵夫は乃翁に非ずして誰ぞとて倍ゝ陰に佛國を煽動して支那の遠征を贊成せるは策に出たるなり然れども公の目的は獨り之に止らず公の見込には獨佛二國の間には時の遲速こそあれ早晩戰爭あるを免かれず左れば佛國が今日に於て東洋に多くの土地を略取する時は他日我國が再び佛國との戰爭に勝利を得て同國より更に巨額の償金を要求するに當り皆取て之を我有と爲その便あれば今日佛國が力を東征に盡すは恰も我國の爲めに後日の新殖民地を經營するに同じと思へる固より之を妨くる杯は遠き筈なりと云々と云ひし由なり

○獨相清國に對するの指揮　近頃獨逸ステッチンより達したる報道に據るに獨相ビスマーク公は巴里北京兩政府間の紛議完結せざる間は支那政府の爲にウチルカン造船所にて製作したる三艘の甲鐵軍艦をして獨逸海外に出でしむ可らずとれ特命を發したる由(此一報は昨日我紙上にも掲げたるとなり)あるが右に就き說を爲すもの丶言に千八百七十年に發布したる英國の外國就役條例には國務省或は地方長官は英領内に於て該條例に違背して軍艦を製造するものありと認むれば其製造を差し止むるとを得んとに反して其船主が該條例に違背するとの證據を擧け得る時は其差し止めより生ずる損害を要求するとを得とあり然るに今日の佛清交涉に於ては旣に開戰したりと云ふを得ず佛清兩國政府より各國政府に向て宣戰の沙汰ありしに非ず況んや獨相が支那軍艦の廻送を差し止めたるは福州砲擊の前なるに於てをや左ればステッチン製造の甲鐵艦は支那の軍用に供するものなるは申す迄もなけれど獨相が未た其中立を守る可きの地位にも立さざるに軍艦廻送を差し止むるは如何是れ他日一大不便を生ずるの先例ならんと云ふ

○清國へ出發　前號に記載せし如く吉井海軍少尉は支那備へ赴くるを以てみの程營城艦に乘組を命ぜられしが一昨日横濱發の廣島丸にて清國へ向け出發したり

○佛國議院の和戰論(前號の續き)　又福州の前敗以後清國の軍備を集めたる所あれ共今は旣に水師提督クルベー氏が手中の物となりたればスツと云へば直ちに我軍の爲に擒

よ擁護さるゝな
ことを顧はず支
素より之を知れ
朝三暮四の手段
い又議人をして
當院ぉ向つて當
ては佛國の寬大
されんとを望む
も此趣意を誅る
て其求むる所の
たり、斯くすれ
シー氏は立て其
するものあるが
生し外國とれ紛
損し又財帑を費
る可らず試に観
すや此時に當り
國よ駐めざる所
洋よ奔走そる其
フエリー氏を指
き決して疑を
て十四年前に在
述へたる時、フ
棄を聞くもれう
食はぬ顔付にと
清兩國間に取り
したり
次ぎにフハーシ
出を諦ひさる
れば我政府は未
なりとて事例
送りたる砲艦の
送るに引き換へ
滿場皆大笑せし
ハーシー氏の意
途より其說を
費したり其運
ーシー氏は之
煩よ過き爲先に
したるい決して
のゴブレ氏と我
あらば本員は
信任の投票に
月に於て政府
を占領せし光
めたり、勤王黨
べて曰く本員及
が爲先あらず
るものならし
と當會議を
そるを以て其
しうぞ議長は
三票よ對そる
出を可決するに
○福州居留外
國人は過日在
清事件の仲裁
日上海發の本
が其決議の文
る所ありと云
○タッシャより
佛艦は謹觀よ
對岸偈は難觀
する爲めなり
後は旣に